

独自カリキュラムと多様な研修で 教員の意識改革など準備を進める

東京都町田市

東京都町田市は、2016年度から東京都の指定を受け、小学校英語の教科化を見据えた研究を推進している。地元の玉川大学と連携し、現場教員とともに練り上げた高学年向けの英語カリキュラムを基に、中学年向けのカリキュラムも作成。英語教育推進リーダーの検証授業を経て、2017年度から現場で活用している。研修も各校の英語教育担当者向けに年十数回用意するなど、教員の意識改革、指導力向上に努めている。

町田市教育委員会の施策

カリキュラム作成、研修の充実、授業時数確保の提案とあらゆる面で現場の推進体制を整える

市が目指す方向性

教員の意識改革により、 担任主体の授業に転換したい

町田市では、10年ほど前から地元の玉川大学と連携し、高学年の「外国語活動」のカリキュラムを独自に作成し、全市立小学校で運用してきた。2013年度には、その検証授業を10回程度実施し、その結果を踏まえて2014年度にカリキュラムを改訂した。学校教育部指導課の酒井章指導主事は、次のように振り返る。

「授業者の声を反映して、子どもが意欲的に学べるよう、より必然性の高い場面設定にして、『Hi, friends!』と同じ順序で表現を学ぶ形にしました。現場の教員、玉川大学、指導主事が議論したことで、よく練られたカリキュラムが完成し、現場からの不満の声が大幅に減りました」

当時の現場はALTへの依存傾向が強く、市教委は、ALTの協力を得つつも担任が主体的に授業を行う必要性を痛感していた。そこで、教員の

意識改革と、中学年向けのカリキュラム開発をねらいとして、東京都「英語教育推進地域」に手を挙げた。そして、2016年度から指定を受け、新学習指導要領に対応したカリキュラム開発と実践を進めている。

実践内容

2018年度からの先行実施 に向け着実に準備を進める

推進体制として英語教育推進会議を設置し、小学校では国・都の英語教育推進リーダー（2人）と合わせて、7人を英語教育推進リーダーに任命（2017年度には9人に増員）。また、各小・中学校から英語教育担当者を1人任命してもらい、英語教育担当者連絡会を設置した。

カリキュラム開発

まず、玉川大学に委託して、高学年向けを基に中学年向けのカリキュラムを2016年に開発。2学期に英語教育推進リーダーによる検証授業を6回行い、修正した上で全校に配布し、



学校教育部指導課
指導主事

酒井 章

さかい・あきら

東京都内の中学校教諭（英語科）を経て、2013年度から現職。

東京都町田市プロフィール

◎ 1958（昭和33）年、東京都で9番目の市として誕生。交通の便のよさを背景に商業が集積する一方、緑豊かな美しい自然、多くの大学等がある学園都市の面も併せ持つ。

人口 約42.9万人 面積 71.8km²
公立学校数 小学校42校、中学校20校、
児童生徒数 約3万3000人
電話 042-722-3111（代）
URL <http://www.city.machida.tokyo.jp/shisei/shiyakusyo/gyomu/kyouiku/>

2017年度から活用している（図1）。

「中学年向けのカリキュラムは、高学年の内容を下ろしたものがほとんどでしたが、検証授業では予想以上に3・4年生が活発に英語を話していました。中学年でもこんなにできるのだと、参観した中学校教員が驚くほどでした」（酒井指導主事）

カリキュラムの特徴は、15分間の

図1 中学年向けカリキュラム 4年生の指導案(抜粋)

第4学年 【Unit 6-1】 一日の生活を紹介しよう			
Hi, friends! 2 Lesson 6 What time do you get up?			
本時のねらい		本時の目標語句	
英語での時間の言い方に慣れ親しむ。		時間を表す数 曜日: 1~12 長針: 1~60	
A: What time is it? B: It's eleven fifteen.			
展開	児童の活動	HRT	ALT
挨拶 1分	全員が元気に声を出してHRT、ALTと挨拶をする。	ほろほろの挨拶 HRT: Hello, class. Ss: Hello, Ms./Mr. (担任の先生の番号) ALT: Hello, class. Ss: Hello, Ms./Mr. (ALTの先生の番号) ALT: Let's start our English class.	児童が元気に声を出して挨拶をする。
動機付け 目標 3分	今日の授業では、どのようなことをやるのか、確認する。	本時の活動への動機付け 絵本「ほろほろの朝」(5分)の時間を確認し、オーストラリア、インドネシアの時間も確認する。日本と外国の時間差があることで1時間差がある。	児童に本時の活動内容への興味をもたせる。
導入・練習 11分	1から60の数字を覚える。1時から12時を覚える。時間を読み取る。 Clap チャンプ (単語なし) It's one. It's two. It's three. It's four... ALTとHRTの目標表現のペアを会話で練習する。	目標語句の提示 ●11~60の数字を覚える。 ①1時の時計を見て、It's one. を導入する。 1時から12時まで行なう。 目標語句の練習 ●手拍子(2拍子)でリズムにのせて時間を言う It's one. It's two. It's three... 目標表現の提示 ●HRTとモデルを提示し、時計を使用し、1時、2時の言い方を聞かせる。	●絵本 Activity Sheet 1~60の数字 ●時計 ●チャンプは手拍子(2拍子)でリズムよく練習する。 ●時計 ●デジタル時計のデジタルカード(10枚)
	ALT: What time is it? Ss: It's five. What time is it? ALT: It's seven. 何時何分の言い方のモデルを聞く、練習をする。	ALTとモデルを見せる。フラッシュカードを見せ、何時何分の練習とさせる。	
	ALT: What time is it? HRT/Ss: It's seven twenty-five. ALT: What time is it? HRT/Ss: It's eight thirty.	(HRTがアタッシュカードを見せる) (HRTがフラッシュカードを見せる)	
挨拶 1分	HRT: Thank you, Ms./Mr. (ALTの番号) Ss: Thank you, Ms./Mr. (ALTの番号) ALT: See you. See you next time. Ss: See you!		終わりのあいさつをしつかりとする。

モジュールに対応していることだ。

「先行実施では高学年でモジュールを取り入れる学校が多いと予想されるため、その教材としても選べるようにしました」(酒井指導主事)

一方、高学年では、『Hi, friends!』や東京都の英語補助教材『Welcome to Tokyo』などのほかに、他教科で学んだ知識を使って英語学習を行うCLIL*1も導入。2016年度に玉川大学で講習を受けた英語教育推進リーダーが指導案を作成し、社会科の単元と英語のクイズ大会をリンクさせるなどの内容で公開授業を行った。

「英語は嫌いでも社会なら興味を示す子もいます。主に既習事項について取り寄せたのですが、実生活に基づく必然性が高い内容だったため、子どもたちはとても意欲的で、内容的にも面白い授業でした。全教科を担当する担任は引き出しが多く、そこに担任が英語の授業を行う意義があると実感しました」(酒井指導主事)

* 1 Content and Language Integrated Learningの略。

各種研修の用意

同市では、2018年度から全市立小学校で、中学年は年間35時間、高学年は年間70時間の小学校英語の全面実施を決定。2017年度はその準備段階として、中学年を年間15時間に増やし(高学年は年間35時間)、さらに2016年度に整えた体制を現場に下ろすため、様々な研修を用意した。

①小学校英語公開授業参観研修 各英語教育推進リーダーが自校で公開授業を行い、それを各校の英語教育担当者が最低2回は参観する。

②玉川大学による校内研修 玉川大学から派遣された講師が全市立小学校を回り、英語教育推進リーダーの授業動画を見ながら教員と討論を行う研修を、各校で年2回ずつ実施。

③還元研修 国の中央研修の受講者による還元研修に、各校の英語教育担当者が参加。参加者はその後、各校で伝達研修を行う。

④夏季休業中の研修 希望者対象に、

* 2 ベネッセが提供する小学校の外国語活動で学んできた英語力の4技能をタブレットを用いて測定するテスト。

指導力育成と英語力向上研修を実施。

「各研修ではなるべく、実際の授業を見てもらうようにしています。また、先行実施は様々なことにチャレンジできる時期だと伝え、先生方が完璧を目指して気負いすぎないように配慮しています」(酒井指導主事)

授業時数の確保

授業時数増への対応を各校が検討できるよう、市教委では『小学校英語』先行実施の手引き』という冊子を作成し、複数の具体案を提示した。

「地域活動が活発な地域のため、土曜日に授業を行うのは難しく、市内の小学校では、国語の1コマ分をモジュールにしてドリル学習などに充て、それで生まれた時間に英語を充てる学校もあります」(酒井指導主事)

成果・展望

検定試験も活用し、現場に具体的な目標を示したい

事業指定から1年が経ち、教員の英語教育への意識は高まりつつある。

「世の中が後押ししている部分もあると思いますが、各校の校長からは先生方の意識が前向きに変化していると聞いています」(酒井指導主事)

今後の課題には、「評価」「読み書きの指導」「支援員」を挙げる。読み書きの指導法については、玉川大学に委託し、2016年度から指定の小学校で行われている「放課後英語教室」で試行した結果を踏まえて、本年度中に指導案を作成する予定だ。また、児童の英語力を検証するため、「GTEC Junior」*2の活用も検討中だ。

「目標がはっきり分かれば、先生方は納得感を持って指導できます。その点、この検定の出題は、目指すべき英語力の方向性が具体的に分かり、今後に生かれます。検定もうまく活用しつつ、先生方をさらに支援していきたいと思っています」(酒井指導主事)

英語教育推進リーダーを中心に研修を重ね、 徐々に教員の意欲と指導力を高めていく



◎ 1970 (昭和 45) 年開校。豊かな自然に囲まれ、明るく、人懐っこい子どもが多い。アットホームな雰囲気のある学校。

校長 土田 昇先生
児童数 250 人
学級数 13 学級 (うち特別支援学級 4)
電話 042-722-8193
URL <http://www.machida-kyo.ed.jp/school/e-honmachida-e/>

主任教諭

村山 恵

むらやま・めぐみ

研究主任。文部科学省及び東京都の英語教育推進リーダー。主に5・6年生の英語を担当。

校内研修の工夫

アンケートを実施して、教員の不安や悩みを明らかにする

「Let's start! 1st hint, it's a fruit.」

町田市立本町田東小学校では、月・水・金の朝 15 分間、高学年で英語のモジュール学習を行っている。この日の 5 年 1 組の授業は、英語専科の村山恵先生が T1、担任が T2 となり、スリーヒントクイズを行った。電子黒板に形や色などのヒントを 1 つずつ映し、村山先生が「What's this?」と問いかけると、子どもたちは一斉に手を挙げて大きな声で「Banana!」「Baseball!」と答える (写真 1)。

続いてプリントを配布し、ペアで考えてスリーヒントクイズを作る。今回は 8 回のモジュールで完結する学習の 1 コマで、次回は日本語で考えた内容を電子辞書*1 で調べて英語に



写真1 モジュール活動の様子。高学年の計3クラスが同時に活動するため、学級担任、ALT、村山先生がいずれかのクラスのT1となる。

直し、クイズを完成させる予定だ。

「『日本語と英語のどちらで書いてもいいよ』と言うと、頑張って英語で書こうとする子もいました。子どもたちは皆、積極的に英語を使おうとしています」(村山先生)

村山先生は、2016年度から国と都の英語教育推進リーダーを務めている。中・高の英語教員免許を持っていることから抜擢され、現在は英語専科の加配だ。校内の英語教育を主導するとともに、指導主事と市内各校を訪問し、授業参観をして助言したり (月 1 回程度)、小学校英語公開授業参観研修や中央研修の還元研修の講師を務めたりして、市内各校への英語教育の浸透に努めている。

以前の同校では、授業における ALT への依存傾向がとても強く、都の事業指定を受けて担任中心の授業への転換を図ることに、かなりの抵抗があった。そこで、村山先生はまず、先生たちに向けてアンケートを実施。すると、「授業の進め方や教材の作り方が分からない」「英語を話せないから授業はできない」といった不安や悩みが明らかになった。

「先生方は『やらない』のではなく『やり方が分からない』のだと分かりました。校内研修を行うにあたって

は、先生方の不安を取り除き、疑問に答える内容にしました」(村山先生)

村山先生は 2016 年の夏以降、先生方を支援するために、校内研修を実施し、ゲームや歌などの活動の進め方とねらいを説明。さらに、村山先生が T1 となって行う授業を担当に見てもらったり、授業案と教材を準備して先生方がすぐ授業を始められるようにしたりするなど、様々な支援を行っている (写真 2)。

「移行期の今はハードルを低くするため教材作成などに深くかかわっていますが、徐々に担任の先生へ移行させていく予定です」(村山先生)

授業づくりのポイント

子どもが必然性を感じて 伝え合える活動を組み込む

同校の英語の授業時数は、市内の



写真2 イングリッシュ・ルームに掲示している村山先生作成のクラスルーム・イングリッシュは、子どもたちに分かりやすいだけでなく、先生方に授業で活用してほしいという思いもある。

* 1 市と連携する企業の協力により、電子辞書が市内 3 校に各 20 台ほど貸与されている。

他校よりも多い。ALTメインの低学年は年間6時間と他校と同じだが、中学年は週1コマの年間35時間で、担任メインとALTメインに分け、高学年は週1コマと週3回のモジュールで年間70時間とし、担任・ALT・村山先生が持ち回りでT1を担当する。

カリキュラムは、中学年では市作成のものを活用し、高学年では『Hi, friends!』、東京都作成の『Welcome to Tokyo』、市作成のものを組み合わせて年度当初に独自の年間指導計画を立てている(図2)。45分授業では『Welcome to Tokyo』、モジュールでは『Hi, friends!』を主に活用。双方で内容が関連している場合は、なるべく同時期に扱うように組み替えた。

「『Welcome to Tokyo』は、特産品や行事など日本文化を海外に紹介する項目が多く、調べ学習の時間が必要のため、45分間かけてじっくり取り組めるようにしました」(村山先生)

『Welcome to Tokyo』や他教科と連動させ、CLILも積極的に行う。

「中学年ではゲームなどで言葉を繰り返す活動でも活発に取り組みますが、高学年では飽きてしまうので、学習の動機づけとして必然性が重要になります。その点、自分で調べたり考えたりしたことは相手の知らないことなので、友だち同士でも意欲的に伝え合おうとします」(村山先生)

例えば、6年生では、日本の遊びや食べ物から1つを選び、その特徴を調べて日本語で書き、電子辞書を

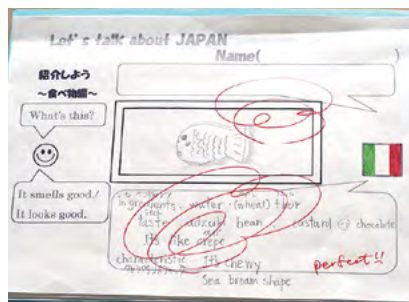


写真3 日本の食べ物を紹介する単元でのワークシート。この児童は、たいやきの材料や味を表す英単語を電子辞書で調べて書いている。

使って英語に直し、発表し合うペア活動を行った(写真3)。

「紹介するものがそれぞれで異なるため、子どもは初めて聞く単語にたくさん触れることにはなりますが、知らない単語でも相手が一生懸命話せば聞き取ろうとしますし、聞き取れた音から言葉の意味を推測しようとしています。また、同じ食べ物でも

英語では2通りの言い方があったりと、新たな発見にもつながります。そうした一つひとつが意味のある学習となりました」(村山先生)

成果と展望

完璧な英語よりも、伝えたいという気持ちを育みたい

村山先生は、学級担任と専科、両方の立場で英語指導を経験し、担任が指導する強みを実感したと語る。

「専科では子どもに会う頻度が下がるので、互いになじむまでに時間がかかります。その点、担任は子どもとの関係を築けているため、すぐ授業に入れます。実際、私が以前担任だったクラスの授業はやりやすかったです。また、他教科と関連づけた内容にしたり、すき間時間に英語の歌を入れたり、フレキシブルに指導ができるのも、担任の利点です」

担任が英語を使うことが、子どもにもよい影響を与えようと言う。

「先生が頑張る姿を見れば、子どもは応援し、協力もしてくれます。私も以前、完璧な英語を話さなければという思いにとらわれていましたが、オンライン英会話を受講した時に、フィリピン人の先生が一生懸命、

図2 6年生の年間指導計画(抜粋)

Unit 時数	※モジュール(15分単位)計画 ※①を15分間で行う 【Hi, friends! ②】	※45分間授業 【Hi, friends! ②】	※45分間授業 【Welcome to Tokyo】
1 10 時間	アルファベットクイズを作ろう ① 挨拶・自己紹介の仕方練習 ② アルファベットの数・言葉作りゲーム ③ 絵本読み聞かせ・名刺カード交換ゲーム ④ どの動物を表す文字かゲーム ⑤ ①-④クイズを作ろう ○そのほかにも1の復習時間にあてる。 DVD視聴(Welcome to Tokyo) など 計2時間	Lesson1 「アルファベットクイズを作ろう」 ・Hi, friends! を使って見つけたアルファベットを書き写し、クイズ形式で紹介する。 ・クイズを作ったり答えたりする中でアルファベットに親しむ。 ○そのほかにも、モジュールを組み合わせたリ、Unit1-2、Unit1-3をやってみたりするなどして1時間を組み立てる。 計3時間	[Welcome to Tokyo] 【Tokyo Map】(教科書裏表紙) いろいろな国や名詞を眺めてみよう! <社会科の学習の復習> 【Welcome Cards】 東京の観光スポットや行事を調べよう! ○調べて発表する。 計5時間
2	誕生日を調べよう	Lesson2	

*本町田東小学校提供資料をそのまま掲載。

私の質問に答えようとしてくれる姿を見て、ネイティブではないのだから完璧を目指さなくてもよいのだと気づきました。何よりも『伝えたい』『相手を理解したい』という思いを育むことが大切です。先生方にはワンフレーズでもいいからクラスルーム・イングリッシュを使ってみましょうと呼びかけています」(村山先生)

「これは英語で何と言うの?」という質問が増えるなど、子どもたちには英語学習への積極的な姿勢が見え始めている。パフォーマンステスト^{*2}ではどの子も意欲的で、「楽しかった」という声も挙がった。スピーチも全体的に上手で、やれば身につくものだと成果を実感している。

教員の意識も徐々に変わりつつある。最近では、日本の旧暦の名称と英語の月の名称を関連させて学ばせるなど、工夫した取り組みをするベテラン教員も増えてきている。

「小学校英語に対して、前向きに取り組もうという雰囲気が学校全体に出てきました。これからも『英語を』教えるのだと肩肘張らずに、『英語で』子どものコミュニケーション力を高めるきっかけをつくるのだと考えて、先生方が指導できるよう支援していきたいと思います」(村山先生)

*2 町田市と同様に東京都「英語教育推進地域」の事業指定を受けた西東京市が作成したテストを、検証として実施した。